

千年古くなった上野原遺跡

開園20周年を迎えた上野原縄文の森。「9500年前の国内最古・最大級の集落遺跡」「7500年前の双子壺を含む重要文化財」として親しまれてきましたが、年代が見直され、さらに古い遺跡であることが分かりました。

解明された誤差

これまでの年代は、放射性炭素年代測定法を基に設定されたものです。しかし、過去も現在も地球上の放射性炭素の濃度が一定であることが前提の同測定法は、開園当初でも誤差を指摘されていました。水床コアの*年縞(アイスランド)、発掘された木材の年輪などを同測定法で計測した結果、実年代との誤差が解明されていきました。日本においても、平成14年ごろから国立歴史民俗博物館の研究グループが中心となり、福井県にある水月湖の湖底堆積物の年縞を調査。過去5万年分

のデータを活用することで、平成25年以降、実年代を推定する精度は高まりました。

今回、上野原遺跡を中央大学の小林謙一教授と県立埋蔵文化財センターで調査した結果、実年代が約千年以上古いことが判明しました。具体的な実年代は決めかねており、8500年前にするか8600年前にするか、1万600年前にするか1万700年前にするかなど、議論を重ねている段階です。いずれにしても、1万1千年に近い昔に「ムラ」があったことには驚きです。

新しい研究方法

土器の圧痕をシリコンで転写し、元

の編み物や植物を観察する方法、電子顕微鏡で観察して虫や種の分類上の所属を決定する方法は多くの成果を上げつつあります。

この研究では、貯蔵穀物の加害害虫であるコクゾウムシが1万年前から存在したことや、人がドングリのような堅い殻に包まれた堅果類を貯蔵していたこと、カラスサンショウの実を入れて防虫剤・駆虫剤の効果を期待していたこと、縄文時代後期にゴキブリが存在したことなどが分かっています。

さらに熊本大学の小畑弘己教授によって、CTスキャナーなどのX線画像装置を使って土器の内部の隙間を解析し、土器に練り込まれた有機物を探し出して3次元画像を作成する研究が進み、大きな成果を上げています。

失われた植物利用の知恵

現在の鹿児島県では竹細工の編み物が知られていますが、全国各地の発掘調査では竹以外のいろいろな材質の編み物が出土しています。約8千年前の東名遺跡(佐賀県)ではムクロジやイヌビワといった周りには植物を使つて、籠などの日用品を作っていたこと

が判明しています。

現代では、日用品のほとんどがプラスチックなどの材質に変わり、植物利用の知恵は失われつつあります。上野原縄文の森では、鹿児島植物利用についてのフォーラム、今回紹介した圧痕や編み物の企画展を開催します。千年古くなった縄文遺跡でお待ちしております。

(文責)上野原縄文の森 堂込

*長い年月の間、湖沼などの底に堆積した土などの層が描く特徴的なしま模様。

郷土の扉

The gateway to local history



13,000年前の圧痕(中種子町三角山遺跡)

上野原縄文の森 開園20周年記念第64回企画展

■南の縄文文化～縄文人の心を探る～

- 南の縄文文化と北の縄文文化を比較しながら紹介します。
- 期間=11月23日(水・祝)まで
- 場所=上野原縄文の森展示館企画展示室
- 料金=小中学生150円、高校・大学生210円、大人320円

■開園20周年記念かごしま遺跡フォーラム

- 縄文文化観の転換や、縄文時代の植物利用についての講話です。
- 日時=10月22日(土)午前10時～午後4時
- 場所=国分シビックセンター多目的ホール
- 講師=新東晃一さん(南九州縄文研究会前会長)、眞邊彩さん(県教育庁文化財課職員)、寺田仁志さん(県立埋蔵文化財センター元所長)、小畑弘己さん(熊本大学教授)
- 定員=先着200人 ●資料代=500円

問・申=上野原縄文の森 ☎(48)5701

開催中